
日本戦乱記

水没王子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日本戦乱記

【Nコード】

N9764U

【作者名】

水没王子

【あらすじ】

2050年、それは突然起こった。

近畿地方が日本からの独立。

そしてそれは日本全土を巻き込む大戦乱を巻き起こす。

あるものは己の信念を貫き通すため。

あるものは故郷を護るため。

あるものは己の欲のため……

プロローグ 日本大乱

2050年。それは突然起こった……

大阪を起点に近畿地方の日本政府への反乱。

この反乱に対し日本政府は平和的解決を望み、首相と反乱首謀者との会談で何とか治めようとした。

しかし、その考えは甘かった。

反乱首謀者、まつなが まさひで松永昌秀は会談中に首相を斬殺。そして一言、

『もはや日本は腐りきっている。今ここで肅清開始を宣言する』

2

近畿地方は『大和国』と名前を変えて日本から独立。

日本政府は米国、韓国に応援を要請。反乱軍鎮圧に軍隊を投与した。

反乱はこれで終わるかと思われた。

しかし……反乱軍側には勝算があった。

2048年、日本で見つかった未知の鉱物。名を『機甲石』

その鉱物は日本にしか発見されず、どのような利用法があるのか分からないまま、無意味は物体として扱われてきた。

しかし、大和国ではそれを使い……あるものを作り出した。

龍甲機

過去、戦国時代の鎧兜を思い出す戦闘用兵器。

空を飛び、地を駆け、敵を薙ぎ払う。

その戦闘力は白兵戦に持ち込めば、全長2メートルほどの龍甲機一体で戦局を変えるほどの物だった。

近畿の反乱軍は北陸道、東海道、山陰道、山陽道に向けて龍甲機と歩兵を進軍。

山陰道、山陽道を護っていた韓国軍は一週間も持たずに自国へ撤退。中国地方は降服。

北陸道を護っていた日本自衛隊は地の利を生かして戦ったが、それでも二週間も持たなかった。

東海道を護っていた日米同盟軍は、50機の龍甲機に完膚なきまでに叩かれ、米国は大和国と不可侵条約を結び撤退。

日本政府は関東を捨て、北海道に臨時政府を設立し防衛を開始。

そう、既に日本国の領土は北海道、九州、四国。これだけだった……

大和国は天皇を擁護し、首都を大阪に改め、九州、四国、北海道の
攻略準備をしていた……

日本がなくなる日は近い、とこの時は全世界が思っていた……

一話 九州防衛軍（前書き）

どうも、水没王子です。

少々オリジナルの戦記物を書くことと昔から思っていたので書いてみました。

こんな駄文でもお付き合い頂けると幸いです。

一話 九州防衛軍

2050年8月27日（大和元年）

福岡県北九州前線基地

山口と北九州……それが九州戦線の激戦区だった。

と言つても今は冷戦状態と言つて良い。大和は本州を治める時間が欲しいのだ。タダでさえ三週間ほど大和軍は強行軍を続けていたのだ。勢いが止まるのは必定である。

しかしながら大和軍は隙あらば九州に攻めてくるだろう。

故に我らも備えは万全にしておかないといけない。

この日本軍、福岡県北九州前線基地には元自衛隊の兵士が500しか居ない。残りは少年兵や義勇兵ばかりだ。

しかも実質的に役に立つのは元自衛隊以外の人間だろう。

自衛隊の人間達は地獄を見ているのだ。

中国戦線で見た龍甲機の恐るべき力、一方的な蹂躪、それによって死んでいく戦友たち。

彼らはそのような戦場を見てきたのだ。トラウマになるのも仕方ないだろう。

ちなみにこの基地の平均年齢は17歳から25歳だ。

何故そのような少年、青年達が集まっているのか。

それはある事件がきっかけだった。

『東海道虐殺事件』

東海道の人たちは大和軍が攻めてきた際にデモを起こした。

それは比較的規模の小さな反戦デモ。

しかし、大和軍はその反戦デモを行った土地の人間を皆殺しにした。

その情報は全国にすぐさま行き渡った。

結果として大和軍が比較的近くまで来ている地方の人間は降服。まだ距離のある地方は防戦の構えをとった。

防戦の構えをとった地方では義勇兵、さらには少年兵たちが一気に集まったというわけだ。

まあ、そんな事はどうでも良いだろう。

今、私に必要な情報は山口の大和軍基地の情報。

そして、この基地の情報だけなのだから。

私は眼前の戦に力を注ぐ。これが私の役目なのだから……

私は椅子から立ち上がり自分の部屋から出る。目的地は大体決まっている。まずは……あそこだろう。

北九州前線基地練兵所

『構え！撃て！！』

その声を号令に基地に響き渡る銃の発砲音。この基地の日常だ。

「頑張っているな」

私は号令をかけていたとある少女に話しかける。

「立花さん！いえ、私の出来る事はこれぐらいですから」

「いや、君はこの基地で上位に入るほど能力が高い。しかも謙虚だ」

「あ、ありがとうございます」

彼女の名前は細川結衣義勇兵として入って来た一人だ。彼女は何事

もよく考え慎重に動く。その慎重さは時に武器になる。故に私はこの少女に一部隊を任せている（女性のみの部隊だが）

「加藤に小西、それに黒田は何処にいるか知っているか？」

「あ、はい。加藤さんは白兵戦の練習のためにあちらへ。小西さんは銃の点検、黒田さんは作戦室に行きました」

「そうか……ならば最初に加藤の所に行くか。邪魔をしたな」

「いえ、敬礼！」

彼女がそう言うのと彼女の部隊全員がこちらに向けて敬礼する。私はそれに敬礼で返す。

彼女の部隊の中に一人、気になる少女が居たが……それは後で良いだろう。

私は白兵戦演習をしている加藤の所へ向かった。

『やあ！えい！』

「そんなんじゃない直ぐにやられるぞ！！気合を入れろ！！」

『おおー！！』

白兵戦の練習場、そこは異常な熱気に包まれていた。その熱気の発生源……そこには身長190はあるだろう大男。名を加藤かとう清重きよしげという。

「加藤、どうだ？新兵の様子は」

「おお！立花！！どうもこうも無い。気合がたりねえんだ！」

「……………私が聞きたいのは能力だ。根性論ではない」

確かに戦争における精神状況は重要だ。しかし、士気を上げるよりも先にこの新兵達を使える状況にまで訓練しなければならない。

「そうだな……………完璧に戦えるようになるためには、あと五日といったところか？それこそ龍甲機なんぞに來られたら一瞬でやられちゃう」

「そうか……………五日か……………どうにか三日で頑張ってくれ」

「……………まあやれる所までやってやるさ。それよりも、本部からは何か連絡が來たのか？」

「今日の午後に物資が届くらしい。それぐらいだ」

「よっしゃ！おい、お前ら！！今日は上手い飯が食えるかも知れねえぞー！！」

『おおー！！！』

加藤に預けている新兵達が一斉に喜びの声をあげる。

このところ食料が届かずに軍用レーションばかり食べていた。私も飽きていた頃だ。新兵なら尚更だろう。

「加藤、私は武器庫に寄ってから作戦室に向かう。何か報告があったらいつでも来てくれ。実質、この基地で能力が高いのは細川と小西、黒田にお前だからな」

「おう！じゃあ夕方の物資搬入の時に一度行くぜ」

「そうして貰えると助かる。じゃあな」

「ああ、敬礼！」

新兵達はぎこちなくも敬礼をする。

まるで三週間前の私を見ているようだった……

北九州前線基地 武器庫

「小西、居るか？」

「はいはい……って立花さん！？」

武器庫の奥から現れたのは軍服の上から白衣を着た男。右手には大型ライフル。左手にはその銃弾を持っている。この男の名前は小西^{こにし}ゆきまさ
行正

「ふむ、対龍甲機用の銃弾か？」

「はい、普通の銃弾は意味無いですから……それで、どうしてここへ？」

「細川が銃の点検に行ったといったからな。まあ実際は改造だった
が……」

「結衣ちゃんが？アハハ……すみません」

「別に構わない。君には部隊を預けていないし、君の改造には助けられる事ばかりだ。これからもよろしく頼む」

多分、小西がこの基地に居なかったら一週間前の大和軍襲撃の際にこの基地は壊滅していただろう。

小西はこの基地の護りの要、といえる存在なのだ。

「午後に物資の搬入が行われる。およそ武器も届くだろうから午後には作戦室に来てくれ」

「了解、それにしてもこっちには龍甲機は無いんですかね？」

「日本軍も開発を急いでいるらしいが……この基地に届くのは難しいだろうな」

「あはは、そうですね……一週間前の時に何とか撃墜して改修しとくんだったな」

「そういつでも相手を押し返すのが我々には限界だったかな」

「そのためのこのライフルですよ」

満面の笑みで告げる小西。よほどの自信作なのだろう。

「もし次の機会があつたら頼むぞ？」

「了解、ではまた午後に」

「ああ……じゃあな」

北九州前線基地 作戦司令室

作戦司令室には大量の機器、そして一人の少女が居た。

「黒田。何か分かったか？」

私は部屋に入ると直ぐにその少女に話しかける。

「……全然、相手もバカじゃない」

「まあそうだな。味方からは？」

「物資搬入、それだけ」

全く、司令部は何を考えているんだが……いい加減に反抗作戦を考
えるべきだろう。

「雪、食べる？」

「いや、結構だ」

雪とは私の名前だ。たちはな立花雪名前は女のようなが、男だ。そして彼女
は黒田聖くるだ ひじりこの基地の参謀として働いている。

彼女は食べかけレーションを私に勧める。およそあまりの不味さに
食べたくなかったのだろう。

「……ゲロマズ」

「午後に物資が来る。それまで我慢する事だな」

「……うん」

私は司令室の椅子に座ると机の上に置かれている書類に眼をやる。
この基地内の不満や要望を纏めた書類だ。午後まではまだ時間があ
る。

先にこの書類を片付けるか……

午後

私は、黒田、細川、加藤、小西が作戦司令室に來ると輸送物資を届ける車両を出迎えるために基地の正門の所へ向かう。無論、残りの四人もつれてだ。

「いや、今回の物資はなんだろうな、俺としては車海老が嬉しいな」
「」

「加藤さん、車海老をこの前線基地に届けると思いますか？」

「ハッハッハ！ 確かにもつと簡単に送れる物が届くだろうな！ だが小西、もう少しは夢を見ても良いと思うぜ。結衣ちゃんは何が良い？」
「」

「え、わ、私ですか……えっと……久しぶりにだご汁を食べたいですね。黒田さんは？」

「蜜柑」

「確かにビタミンCは重要だからな。しかも冷凍させれば長持ちす

る。ありえるかもしれないな」

「……やった」

小さくガッツポーズをとる黒田。そんなに嬉しいか？

そんなふうには私達がくだらない会話をしていると地平線の向こうからこちらに向かってくる運搬車両。どうやら無事に着いたようだ。

「門を開ける！全部隊で輸送した物を運べるように指示を出せ」

「「「了解！」「」」

「……蜜柑」

……黒田、お前はいい加減に戻って来い。

輸送車は全部で六台。

六台のうち五台は食料、および弾薬などだった。

そして……最後の一台は……我々の予想を遙かに上回るものだった

……

「そ、そんな……日本軍も完成させたのか」

「立花さん……これってやっぱり」

隣に居た細川は指を刺しながら言う。

「ヤバイ、俺鼻血が……」

小西は鼻血を拭きながら見る。

「マジかよ……でもこれで……」

加藤は自然と武者震いをしながら……

「……これで負ける確率は減った」

黒田は冷静に計算しながら……

「……まさか、この基地に届くとは」

私は既に次の作戦について考えながら……

「龍甲機」

たった六機の龍甲機。しかし……この六機の龍甲機が九州戦線を覆すのだと、私は確信していた。

一話 九州防衛軍（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

感想を頂けるとありがたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9764u/>

日本戦乱記

2011年10月8日18時44分発行